

工学系学生国際交流基金報告書

派遣者氏名：	
所属専攻・研究室・学年：化学工学専攻 下山研究室 修士1年	
派遣先大学・専攻： ミュンヘン工科大学 化学専攻	
受入教員名： Johannes A. Lercher	
派遣期間：平成 26年 10月 1日 ~ 平成 27年 9月 30日	
申請カテゴリー： <input type="checkbox"/> (C1)SERP <input type="checkbox"/> (C2)AOTULE <input type="checkbox"/> (C3-a)部局間協定校 <input checked="" type="checkbox"/> (C3-b)全学協定校 <input type="checkbox"/> (C4)その他	
研究（プロジェクト）題目： Heat of Adsorption and Entropy Change of Cyclohexanol from Aqueous Solution on BEA75	

- ・ 帰国後1か月以内に工学系国際連携室宛（ko.intl@jim.titech.ac.jp）にMS Wordファイルにて提出ください。
- ・ SERPで派遣された場合は、受入教員の評価書も添付して下さい。
- ・ この表紙を含まず、ページ数は2～4ページ、ファイルサイズは3MB以内としてください。
- ・ 研究室や宿舍内の様子の写真、図表、イラスト、滞在中のその他の写真などは挿入可です。ただし、それらを掲載する際には簡単な説明を加えて下さい。
- ・ 提出された報告書の2ページ目以降を工学系のホームページに掲載いたします。また、別途、クロニクルへの執筆をお願いすることがあります。

報告書必須記載事項

- ・ 派遣大学の概要（所在地、創立、大学の規模など）
- ・ 所属研究室での研究概要とその経過や成果、課題など
- ・ 所属研究室内外の活動・体験（日常生活・余暇に行った事など）
- ・ 留学先での住居（寮、ホームステイ等）、申し込み方法、ルームメイトなど
- ・ 今回の留学から得られたもの、後輩へのメッセージ、感想、意見、要望

東京工業大学大学院理工学研究科

工学系学生国際交流基金報告書

派遣年 : 平成26年
氏名 : 篠田 誠司
所属専攻 : 化学工学専攻
派遣先 : ミュンヘン工科大学

1 留学先大学の概略

1868年、バイエルン王ルートヴィヒ2世により創立され、1877年に王立ミュンヘン高等技術学校と改称、変遷を経て1970年より現行名称となる。ノーベル賞受賞者を17人輩出しており、ドイツではエリート大学として有名である。政府による研究予算を重点配分する政策(エクセレンス・イニシアティブ(Exzellenzinitiative)政策)[1]の指定大学になっており、研究予算が重点配分されている[2]。学術研究費の国庫補助は国内第3位(工科大学としては1位)。2009年のTHESによるランキングではドイツ国内トップとなっている。2010年のドイツ国内ランキング2位、タイムズによる2010年の世界ランキングは101位だった。

2002年には付属のビジネススクールを設立し、英語のみでビジネス系の学位を取得するプログラムも多数用意されている。2011年のドイツ大学教育研究所(CHE)による経営学ランキングで、学習状況、自由な学習の可能性、国際性、研究費用の4部門においてドイツ国内トップにランク付けされた[3][4]。

ドイツ語圏ではテーウー ミュンヘン(TU München)、または、トウム(TUM)と呼ばれている。

引用:Wikipedia

2 留学中の勉学・研究

前期はドイツ語の語学の授業を1つと、ラボに所属しての研究活動、

後期は英語の語学の授業3つと、専門科目が2つを履修登録した。

後期はそれ以外に1つ登録はせずにドイツ語の語学の授業をとっていた。これは、前期と同じレベルの授業を受けたために、後期は試験が受けられないという制度上の問題の為である。

前期

German as a Foreign Language A2.1

後期

English – Basic English for Business and Technology – Global Module B2

English – Basic English for Business and Technology – Systems and Planning Module

B2

English – English Grammar Compact B1

Surface Chemistry of Heterogenous Catalysts

Industrial Chemical Processes II – Petrochemical Processes

専門科目の成績があまりよくなかったと思う。テスト金中に体調を壊した事と、テストの形式がすべて記述式で説明するようなもので、日本で受けたことのないようなものであったため、あまり良い結果とはならなかった。

研究に関しては、化学科の Johannes A. Lercher の研究室でゼオライト系の触媒を用いて、炭化水素の吸着性能を評価した。主に実験が中心で作業をしている時間が長かった。最後に自分で行ってきた研究に関して英語で論文を作成した。

3 留学中に行った勉強・研究以外の活動

毎週 1 日はバドミントンを行っていた。

また、毎週日曜日はミュンヘン在住の日本人の方々と(主に社会人)野球を午前中から行い、午後はビアガーデンに飲みに行くという週末を送っていた。

4 留学を終えて、自分自身の成長を実感したエピソード

研究室に前期の間行っており、その際にスーパーバイザーを務めてくれた博士の学生に、後期に久しぶりに会って話をした時、「君の英語はとても上達したね」と言われたこと。また、1対1で暇なときに飲みに行けるような中国人の友達が出来たこと。

5 留学先での住居

学生寮(Studentenwerk)

派遣交換留学の場合は、ミュンヘン工科大学が住居を確保してくれる。その際は大学側から送られてくるメールへの返信が必要なので、忘れないように。

自分はキッチン、バス、トイレが 10 部屋で共同で、それぞれ独立した部屋があった。

6 留学先での語学状況

研究室の三分の一は中国人だったので、英語で過ごしていた。

授業は化学科はほとんどの授業がドイツ語であり、自分はあまりドイツ語が出来なかったため、英語で開講されているものだけを選んで履修した。学科ごとの違いが大きく、機械系の学科は通常から英語で開講されている授業が多いようである。

TOEFL は64点だったが、だいぶ初めの生活は苦勞した。前期は研究室で作業ばかりやらされて、あまり英語をしゃべる機会がなかったが、後期になると時間もできて、外国人の友達も増えてきて、慣れるようになった。

7 就職活動

留学先で行ったこと、また帰国後どのように活動する(予定)など。

留学先では、主な就職活動は行っていないが、化学系の会社が集まる展覧会などに行き、企業の様子や、欧米を相手にしている日本企業の方と様々な話をした。

帰国後は同期とは一年遅れで就職活動を行う予定である。今回の留学経験を生かし

て、自己 PR などをできればよいと思う。

8 留学を希望する後輩へアドバイス

留学と海外旅行は違います。現地で1年生活することは、その国の1年間のイベント事を全部体験でき、日本という国を客観的に見ることのできる機会でもあります。日本人の学生と、海外の学生が考えている人生プランや生き方の違いなど、知ることになります。また、交換留学生同士で友達になることで、世界中に友達が出来ます。留学をすることで、その後の自分の人生設計にも多大な影響を与えることは間違いありません。